2024年
令和6年10月10日(木)

午後6時30分より(8時頃終演予定)

於:観音寺境内(雨天時は本堂)

愛媛県宇和島市石応(こくぼ)1351(Tel:0895-28-0051)

国道56号線を松山方面より宇和島道路に入り
板島橋→トンネルを抜け、石応別当降り口にて降りる。
信号を右折、分かれ道を左に進み、約5キロ。
石応郵便局の先、右に入る。駐車場へ。

料金:1,000円 ※お席に限りがありますので、お早めにお申し込み下さい。

【予定演目】

◆「祇園精舎」平家物語冒頭句

◆平家物語 外伝「堂崎観音堂悲話」～宇和海落武者伝説～
川村素子 作詞／川村旭芳 作曲(平成18年10月初演)

◆源氏物語より「葵(あおい)と六条御息所(ろくじょうのみやすどころ)」
川村素子 作詞／川村旭芳 作曲(平成18年1月初演)
大河ドラマ「光る君へ」放送にちなみ
源氏物語千年紀(平成20年)以来の本公演での再演です!

【演奏者プロフィール】

筑前琵琶奏者(ちくぜんびわ) 川村(かわむら) 旭芳(きょくほう)

神戸市出身在住。
八歳より母の勧めで、筑前琵琶日本旭会総師範 故二代柴田旭堂に師事。
古典曲を継承しつつ新作の創作にも取り組み、
阪神・淡路大震災の追悼曲をはじめ、母 川村素子の作詞による作品も発表。
「堂崎観音堂悲話～宇和海落武者伝説～」は、母娘合作の代表作の一つ。
1998年～2010年、和楽器オーケストラ 邦楽合奏団「鼎」(KANAE)に所属。
現代曲奏者として、関西の楽団、邦楽社中、音楽大学などの国内外における
公演に多数出演。
2011年、CD『川村旭芳作品集Ⅰ～母娘合作集～』(「堂崎観音堂悲話」収録)
および『川村旭芳 筑前琵琶のしらべ～源平一ノ谷合戦～』2枚同時発売。
箏・尺八・胡弓などの演奏家四人で結成された和楽器ユニット「おとぎ」の
代表を務め、内子座、八千代座ほか全国の芝居小屋での公演も開催。
門人会「筑前琵琶川村旭芳会」主宰。NHK-FM「邦楽のひととき」他出演。

【その他、四国・愛媛県にちなむ自作曲】
◆「空海讃歌」～入唐千二百年記念～
◆「千歳余り二百歳」～四国へんろ開創千二百年記念～
◆内子町 清盛寺に伝わる平家の落人伝説より「八房の梅～登貴姫哀歌～」

第17回

堂崎観音寺 観音堂の夕べ

耳をすませば今もなお梢をわたる風の音に和して聞こゆる誦経の声

当地に伝わる平家の落武者伝説

一ノ谷、壇ノ浦、宇和島を結ぶ壮大な歴史ドラマを、哀切な琵琶の音と語りでお聴き頂きます。

お問合せ・ご予約 観音寺(山崎)Tel:0895-28-0051/携帯:090-3461-7307

題字:信田 春塘

＊平家物語の世界＊

一、「祇園精舎」 平家物語原文より

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響あり
　娑羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらはす
　　おごれる人も久しからず 唯春の夜の夢のごとし
　　たけき者も遂にはほろびぬ 偏に風の前の塵に同じ

二、「堂崎観音堂悲話」～宇和海落武者伝説～

川村素子 作詞／川村旭芳 作曲

耳をすませば今もなお 岩場に寄する波の音
　梢を渡る風の音に 和して聞こゆる誦経の声・・・

四国は潮の流れによるのでしょう、平家の落人伝説が各地に伝わっています。その一つ、ご当地 観音寺に伝わる哀れな物語を、山崎忠司住職より依頼を受けて創作した作品です。節を付けて歌う部分と、節を付けずに語る部分を交互に配した、一般的な琵琶曲にはない浪曲のような手法を取り入れています。
平成18年（2006年）10月「第二回 琵琶の夕べ」にて初演。以来15年以上に亘って毎秋この地で演奏していますので、お馴染みの曲として聴いて下さる方もいらっしゃるでしょう。
一ノ谷、壇ノ浦、宇和島を結ぶ壮大な歴史ドラマ。八百余年の時を経て、哀切な琵琶の音に乗ってよみがえります。（CD「川村旭芳作品集Ⅰ」～母娘合作集～に収録）

＊源氏物語の世界＊

いづれの御時にか 女御更衣あまた候ひ給ひける中に
　いとやむごとなき際にはあらぬが すぐれて時めき給ふありけり

三、「葵と六条御息所」 川村素子 作詞／川村旭芳 作曲

第九帖「葵」より
葵の上は、光源氏の正妻となって十年ほど経ちましたが、恋多き夫との関係は良好と言えませんでした。しかし、自身の懐妊を機に光源氏の愛情を感じるようになっていました。一方、六条御息所は光源氏の最も早い時期からの愛人ですが、逢瀬は間遠になっていました。賀茂祭に参列することになった光源氏を一目見ようと、葵の上と六条御息所は、それぞれ牛車に乗って見物に出かけました。先に着いていたのは六条御息所ですが、後からきた葵の上の従者に牛車を壊され、屈辱的な仕打ちを受けました。六条御息所はこの一件で、葵の上をひどく恨むようになりました。出産が近づくにつれ、葵の上は病で伏せるようになります。それが六条御息所の生霊の仕業によるものと知った光源氏は愕然とします。葵の上は難産の末に男子（のちの夕霧）を産みますが、産後の肥立ちが悪く、容体が急変して亡くなってしまいます。自身の嫉妬と恨みが葵の上を呪い殺したと悟った六条御息所は、光源氏との関係を断ち、都を離れる決心をしたのでした。

源氏物語の中でも、一際ドラマチックで有名なくだり。
「堂崎観音堂悲話」と同じ平成18年に、母 川村素子の作詞によって創作した作品です。
このたびは導入部に現代語の語りを取り入れて、皆様を源氏物語の世界へといざないます。